

小鍛冶

長唄

全詞章

劇神仙 述

本名題「姿花后雛形」

稲荷山みつの灯火あきらかに、心を磨く鍛冶の道、小狐丸と末の代に、残す其の名ぞ著き
夫れ唐土に伝へ聞く、龍泉太阿はいざ知らず、我が日の本の鉄工、天国天の座神息が、
国家鎮護の剣にも、勝りはするとも劣らじと

〔鍛冶の合方〕 神の力の相槌を、打つや丁々しつていころり、余所に聞くさへ勇ましき

打つといふ夫れは夜寒の麻衣、遠の砧も音添へて、打てやうつつの宇津の山、鄙も都も

秋ふけて、降るや時雨の初紅葉、焦るる色を鉄坐に

火加減湯加減秘密の大事、焼刃渡しは陰陽和合、露にも濡れて薄紅葉、染めて色増す金色は、

霜夜の月と澄みまさる、手柄の程ぞ類なき、清光りんりん美しき、若手の業物切物と、四方に

其の名は響きけり